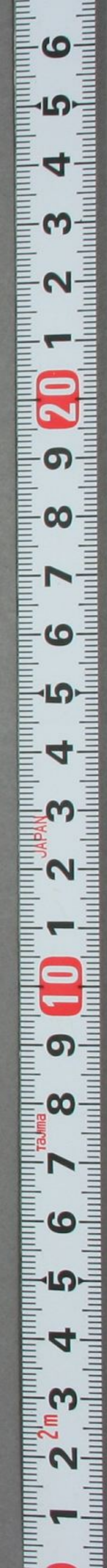


俳諧古今抄

新製衣東花式
呈之五

5
922
5正



他諸古と抄美之下

再校東文式序

蓮二序



むしりたるの建さるるを御抄の七十余巻
虚を去くことと志ありあう初善ら橋陳如の
實一はしり儒書の四百余年章七實さく
ことと一あう懲懲と細悲子の二虚とい
初懲をさうしむ時の要しむこと一虚と虚
ハ実七実あうしむことと要通すこととい
あるしはし他諸のるるや和号連二序の序



古本抄巻五



と寂しい遠く百世の如盤にやうもよと我は海に
 おろれてはるまじく海ははるまじくおれれ
 けらんやこころにま深に商の秋八月十六日付
 序文とま行一了文早観の坂下前と教一
 了重誦再おまらおれまら也

東花式目録

大段十二首條
 小段五十五條

一花と桜也事

- 幸崎のむし山桜めり
 - 花と桜人のり
 - 蘇集一蘇の桜のり
 - 様集集一系桜り
 - △ 高土北野の桜のり
 - △ 桜よむ早のり
 - △ 岩根の花と桜のり
 - △ 二句一意の花れり
 - △ 春秋の花と差ふのり
- 一月に月と早也事

五言抄集

四

○宵闇し月と念ふ
 ○月名は月の
 ○白き月おれ設の
 △管下月白の
 一 ぬれ月也事

△前向より月とらひかゝる
 △月よりお向ふまへ

一 月也二字の語の事
 △月とらふ字とあひかへ

△月とらふ字とあひかへ
 一 儀式の席と奉句也事

△一字の起しも名の事
 △面白頬白の事

○屏風のたし草子盆の事

一 當季の物各也事

△玉は美言の事
 △梅中坊の事

△松虫の句法ある事

一 是れ子なる語也事

○きしきは附合の事

△此所の語はこれ

一 越向一の句作也事

○幸崎の松の様

△入る曲節地の事

一 附合し七名八躰此事

有心 會款 道句 起情

○ 向附 柏子 色立

右七名八案方ニテ對附ハ負外也

其人 其場 時分 時節

△ 時宜 天相 觀相 面影

右八躰附方ニテ空接ハ負外也

一 懷中ノ名目此事

○ 百韻 七十二條 源氏 五十韻

○ 四十四 二奇仙 首尾吟

一 求韻ノ向教此事

○ 源氏行 ○ 二奇仙行

△ 長歌行 △ 短歌行

一 同季ハ之句去一キヤ此事

○ 二奇仙の遺訓ハ二花二月の例ある也

○ 各殘の裏ハ春秋二句の例ある也

右ノ抄序目終

一方法一例序

東文略

はらく古今の法をとりよし仰神の義通別圓の
 法あれは儒書し礼楽書おの式ありしかこころを
 又百の戒律とせしこころを威儀とせし
 ともいふとせしとあるとある人の徳の得るより
 可なりと云書功とせしとせしと時とせし
 時とせしと縦横自在とせしとせしと藩籬ありし
 といふことと世人の義通とせしとせしと

ありしとせしと花揚の言のるしは音連能
 とある人もしぬか書るに可いありしと時と
 されしとせしと時とせしと下よとせしと
 各人よりしと知の法はちりしとせしとや今の子能
 い先家れ行のるよとせしとて齊楚のむしり
 各とせしと世に五倫の文とやうけしと子歳
 の各いふとありしと多しとせしと可いありしと
 七言の上下しとせしと百韻の式せしとせしと
 しといふ余年よりしとせしと儒行しとせしと
 えといふとせしと徳性としとせしととせしと

いけ能浩といらうや一我邦の和光とていふべきに
まこれとていふるはとらむべきとき一其の
の可し言ふ船觸して其はの能率といらう
しうられし連齋此の家よあしん安の新式
と鑿形とあきらより例し其情のちちん
て一歩子とせきうひといふなりて我らよ
能浩の又十余年の新制よりて能浩の能
といふ各ふあれいといふたよし向の能浩と
指合を嫌のばとさうより古式の論をい
あしういりてせれとて能の設をいふは

能浩のけいといふくもく其設あるは或
記向の廉子よも一或の書神の實美と夫
いて孫と暗記する地かくけいりやせめ
え祿の中比より寤永の能中て一能の連年
と其いあるも一昔の能の能とらむ
おし又きくかくの能く一て接まれの力分
一あしちし一其を例の二其ありて其
とある一これいふも一其目此大は家を
貞吉式の所録とらむ一其るや洋におら
詩身連能の中より一其建之の行と

能浩

とあるれととのくしと縁と原とあるのこ
いふふと自知もる者たれせけるは一冊と
ぬるよとやたのた句とあり次よ我昔の
鴉鳴とありて百世の説は使あんと
例の象議と用捨と一

○ 幸崎の松とむより勝と

○ 山と標と志はる ときふ

け翁白く湖南のまらふありて今とてい句と
記さるし及ふとさるにけ服の山標とて時
実評もも崎と松とむとつひらとる而の標と

つる花と標のふ標ととれを我他いむは標
いむしとむ寺の山標とる下

○ 詠りて花とむしと一その昔

○ けりてむ。 山標人

けりてむ標林の標流せとる中古は流約
ふ此の流抄よとてとて例の古凡の流
ふれは今花能流の流なると但らむ標人
得妻糸の名目ありと人をと花よきととれ
むと標れんむとあつんりて花と標の
不秘の秘訣といふとむ

○ ^{新句} あののこころけしめも様も様うふ

^{花序} 今部とむむの盡北一乃田

○ ^鳥 けしめく水は葡萄の枝うき

^{花序} 新梅 版一とふいふ笑ふきり

けしめとぬおの遺訓せふの様と ^{花序} 新梅此新句

うき新折の花はなよふ花あり後の様は猿葉

集の所今多うして新折うきとふ花ありて今北

系様と各様の曲節もある日本書紀此四州

ふ何りう系証しけ二集の撰おときうけしめ

い例のあひくすや我家のあら花論は花と

様よあしき様よあしきうきも何しきと ^{花序} 新梅不到

の所授しして今部とふと秘訣は何れ二

子あおしおよをけりやゆきとある一我家の

能活集と天和の比は ^{花序} 新梅とうき

と論し及びし ^{花序} 新梅とおよ我家の撰おし

て花実とほきに猿葉集よとあるは

け比の炭俵集と変化の中此曲節うて能活

はかくと変とある一あるれ猿葉の大任

系様の美と一部の美を軸といひて集此撰者

の句あしきうきと美に各様の曲節とあり一部の

け設を越の井波よりさなふらふり付事とえひ千金草
のこ名をあけて一思くもて魂をまづれる美神
此百韻より何うされつる言句とて思ふ事とてはよく
秋のむれへ句花よりりて一と書なれ胡蝶とねて
てけ花の客とをまれの後の花と合くまらば
一と書れ花より胡蝶と二句二この格と似あ
そらと花の洞とかりてけ花といふむらり
胡蝶の花と書用ある客の花と書用ある秋と
まらば差ふとる一と書に之は式めはは
彼子午例万格一てけかの指合去嫌と

よむ時の用とるやあつておけ設よりりあつた
かこ方と例の并々通ちるなり

○月に日と月と事

むうより連流りて月に百韻よ八あれい
くよりあつて不あれははしお月る一と
よん日といひ月といふ天象の去嫌と月といふ
自らいひて月次と月次と詞の作者と兼事
七字後も時とあらんらとて一と書なれ
百字附の句とあつて一と書なれ

先格の句とあけて當時の設とあつてあつた
まゝの月座よりうへなる隠見の句とあつ

○ 青園とあつたの秋の文選

よよん秋也 凡そこの文

け青園とせよはして故ふる名々の設あり
てよよん秋の文選の例の月秋と断れり
け西宮の秋とせよはして十六七の青園より
唯今此月の附かくられぬまゝの秋の威風とせ
秋を向置とのをよよん秋の例の文選とせ
青園の秋とせよはして十六七の青園より

はとて十句同月とてよよん秋の文選と
やよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
の句とあつた

○ 八月と秋あり ちよよん秋

よよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
月の二とあつたよよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
の秋と唯今の月とてよよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
よよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
よよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
よよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
よよん秋の例の月とてよよん秋の文選と
よよん秋の例の月とてよよん秋の文選と

学者ももろもろの道もつらき事ありて五月間
の間に月あつていふ事なるは相違なきに人
とありて百世もあつていふ事なきは別なりは古
いに限見たりと申す限のいふ事なきは別なり

○六月やあそびの事とてあつて

是れを嵯峨の落掃舎とて名取の事は此の事あり
ありけりてあそびの事とてあつて是れは月何れ
の月次見ゆめ名取とあるはつとてあつて異名の
議論ありはれは連珠の古或らつとてあつて
の事とてあつていふ事とてあつていふ事と

むかしはあそびの事とてあつていふ事とてあつて

いふ事とてあつていふ事とてあつていふ事と
あつていふ事とてあつていふ事とてあつて

寛制とていふ事とてあつていふ事とてあつて
五月雨とていふ事とてあつていふ事とてあつて

五月雨とていふ事とてあつていふ事とてあつて
五月雨とていふ事とてあつていふ事とてあつて

五月雨とていふ事とてあつていふ事とてあつて
五月雨とていふ事とてあつていふ事とてあつて

かたはし執るは備あはし二月八日の假名に
 かけしは月よりすむはあはしとあはしはし
 音訓の漢論あり今より音訓のあはし
 音よはしはし一人のあはしと訓のあはし
 光天のひきまはしはしと音訓のあはし
 評論あり古あはしと音訓のあはしと
 ありしはしはしはしはしはしはしはし
 是れはしはしはしはしはしはしはし
 け各月あるあはしはしはしはしはしはし

月より他のあはしはしはしはしはしはし
 例のあはしはしはしはしはしはしはし
 ねあはしのあはしはしはしはしはしはし

△あはしはしはしはしはしはしはし

あはしはしはしはしはしはしはしはし
 のあはしはしはしはしはしはしはしはし
 せあはしはしはしはしはしはしはしはし
 あはしはしはしはしはしはしはしはしはし
 あはしはしはしはしはしはしはしはしはし
 たら月よりあはしはしはしはしはしはし

かゝる時今附さるゝ次は月と
しめしめ今附さるゝ今附さるゝ
よ可なり月とさるゝ今附さるゝ
と早きを例の二句三句
月とさるゝ今附さるゝ
前句より月とさるゝ

掃地。せほよりお化められたお

△
あゝいとおおさるゝ
と昔の月とさるゝ

はれいとおおさるゝ
よ及んばさるゝおおさるゝ
よは(さるゝ)其さるゝ
越向とさるゝ

△
踏こけてちりちり
月とさるゝ

け月とさるゝの句同し
一解ははりよおの全解より月とさるゝ
向はさるゝの廉の男ありとさるゝ
アとめさるゝの越向ありとさるゝ

かりて次の月とさひくはけり爰にけり此附と
いひてさへん人といふにさへん人の語也秋
のねれ月といふるをさへん此裁入あり月
といふこととさへんといふと舞舞の句は
二句の向ふらうと入る附との飛法と移ま
る一次に月といふ句はさへんといふ

ちらうくとさへんはけり。是れ也
未だはありともゆりの人
争ふれは氣の短さよ我あり

素性の二争いといふる也月

さへんや彼りといふれ月と月次は次の指令と字を
嫌ふのさへんといひて早に此指令と舞向といふと
さへんと句作は常用とありと二争の中間折あり
てさへんといひかゝるにさへんといふむじりも附合
ありさへんにけり此指令とありとさへん素性の也月
といふるるのめさへん此指令とさへんお分付との用を
いふて早竟とさへん敵對といふ句は恥の二字
といふさへんといふと射の格といふお分付との
さへんといふとさへんといふにけり此指令とさへん行
業といふのさへんといふと素性とさへん此の指令

より元の經氣と駈合くる月の働を知らず
てしる名の冥合を神助とす

△ 干物と云れり者入ぬりきり
月と登りしとす 月はお

け附方と海怪の两用して干物と云ふと干物
と云ふ一物として云れ月附方干物の
かとおくしるの備せる程ありおるを
たしひあしと云ふと海怪は可干物と
あるれいふと干物とすお後二部の凡例と
あること余を例のよき事万化あり

○ 月の二子と見れば事

け格とよと云ふことあり月のおふり或はお方
の指合り或は天象の去嫌と月を二子とす
あり畢竟と月とよと云ふと陰と見二子
世に見れば深家と云ふは又の深家の名目
あり月と月とかくもことあり

△ 秋の川や朝日波は月を
姨投の言ふと云ふ神あり

爰より小倉句服牙之を平伝の表合也此れは
朝日の服へのそとて月をむむつてく牙に
て望まうに指あしはをさうさ句此表の
まへ月と二ほきをまへあへぬる後に姨捨の
名をとりて月の御とあへる也此れは芳郎
と花とらひ文科と月とふまへ流る月花
あへるさへふまへてあ句と回毎と又所
きる山田の形容と称をさへんやまなうの
さへり芳郎とらひ文科とらひて月花と流る
と論ふれとあはらうところつてぬくに作着

の眼力と云ふもやうな月とあへるさへ

あへるさへりては後川

おのりひては三枝 又桑

△ 月夜とをむもあへるさへり

まへりひと山と片答くは月

け接おを越め之國より後川の二表と制部
おとれはやうに表のりてはあへるさへり
ありあへるさへりてはあへるさへり
ある月をおへりてはあへるさへり
飾ふさへりてはあへるさへり

西詠とあるは、
右にとあるは、
秋まあるは、
とあるは、
かりては、
孟、
まうれと、
と秋と、
の、
と、
と、

たてく月むの詔と、
あねと、
と、
此、
新、
月、
節、

○ 儀式の席に奉向此書

我家に奉向の控とり月次めをきく座能活

論を—或と祝言、命と—い、或と哀傷、席に
り、時とおひむね、宗近の各句あれ、各残のを
とし、宗近—らとむ、せまくれ、各句し、はね
あ—も、と花とあ—らよ、かれ、或と—座の老人
く、或と親族の功者、らとむ、—らり、と—まの
始終と、泪あり、さや、まらんと、今、此能、席—と
各句と、す、下、此、場、おと、お、あ、して、あ、と、と、我、も
お、ま、と、ま、人、し、と、花、と、ま、は、ら、ら、と、一、果、を、さ、る、は、句
—と、ひ、た、れ、と、は、ら、ら、と、一、座、の、能、潜、と、く、と、或、の
論、と、ら、及、り、と、と、ら、—、花、も、や、保、成、の、能、潜、と、ら、

ハ、能、事、と、一、座、の、と、り、の、—、あ、り、—、各、案、の、之、句、ハ、能、事
と、也、—、一、座、の、右、—、ま、り、と、し、能、事、と、し、か、ま、ら、の、略、美
—、一、論、及、り、と、と、くれ、ハ、祝、言、哀、傷、の、各、句、の、
祝、言、哀、傷、の、各、残、の、む、ら、と、ら、り、新、用、の、ら、ね
あれ、ハ、各、句、の、各、句、の、服、—、か、り、—、と、と、花、の、用
と、と、あ、の、も、も、或、と、貴、富、高、客、を、新、—、
時、—、あ、り、と、一、座、の、能、潜、—、各、句、と、と、ら、此、換、お、ま、
—、各、残、の、む、ら、よ、の、は、ね、あ、り、—、一、座、の、
そ、れ、あ、れ、ハ、ら、—、一、各、句、の、所、—、と、と、あ、り、と、と、あ、
—、と、—、合、り、あ、書、ま、と、と、あ、り、—、と、と、一、座、の、能、潜、—、

ひきよらるるもやある年御南北新皇のふりあはる

^{各句}七浦やつ子のむと一子あは

△ ^{各句}西原の剛毛一ツのれハ系

されし時世評論よけ各句とけは、夏議
る一ならず我らの式とあたる名斬、雜の
各句よし無ふしとて、書事此服とけ
て四季格とけし、一まゝあとも、の服と
尊くはてからし、各殊のむと、りて
各句のち、一と、支配と、まゝ、は、ねと例の
よのほねの教むありき、られと、各句此家評

ふけき、は、のほねあ、な、各句と、一、ゆめ、ら、
あ、ら、ら、一、各、の、つ、と、の、一、七、浦、の、あ、ら、ら、
と、は、ら、ら、と、定、家、の、一、ま、は、む、一、書、事、の、各、評、
と、か、れ、ら、と、せ、け、お、一、各、句、の、事、と、一、あ、ら、ら、
と、書、事、と、一、の、用、可、用、の、一、お、ら、ら、と、一、
△ 他、借、ら、今、人、偏、の、む、は、ら、ら、
△ 面、白、頬、白、目、白、は、ら、ら、
○ 隣、了、可、ま、ら、と、一、あ、ら、ら、と、一、あ、ら、ら、
△ 屏、凡、の、た、ら、と、一、あ、ら、ら、と、一、あ、ら、ら、

け二連とらる用と申す也前之新陣二百篇

古き竹のあつとひあつて竹の百筋の筆のさびら
はらら我家のむねとさく人偏の能借とて何れ
たれとてさごと月白類白也拍子よあげたる言
一也此用あつとてさく後と使つて産儀集
く変化の中此曲節よりて各残の花とてあ
これいさつとてさく此の附合とてあつとて
ぬとて思つとてさく此の用とてあつとて
とこれいさつとてさく此の用とてあつとて
事一今一此のそ尾とてさく此の用とてあつとて
とこれいさつとてさく此の用とてあつとて

○ 書手よ物名此事

古抄に書つて此屏風といひ牡丹の宮に若とて
とてあやあつとてさく此の用とてあつとて
とあるとてさく此の用とてあつとて
と論あし難く用く書手よとてさく此の用とて
あるとてさく此の用とてあつとて

△ 附句
折かしく梅中坊の伝書信

折の書又答とてさく此の用とてあつとて

ハ仙人其まゝとてけりて曉の露とくらくぬる
 あれハまを客とて名目よりてなより指令を
 くらねとてまを句と拈指の指令ありてまを客
 と書まよし用かきまぬと白雲の二つとありら
 下後の拈指くらまをまの指令やらるとあり
 うとありらひるる句作のまぬりくらけし例
 下千句一カ章とてまをまをるる

秋凡しき川やあまのすゝめの色

△ 心塵とやうくさる廿月歌

鳴くふ囀りも鈴も ねまも

けねまの才とて和漢ノ奇絶の句にせらるる世
 下韻字するも何とてそと錯綜顛倒の
 とついで論とれハ才之のふりやとぬいむと
 あれいけ句とよのきねし作る時とねまや雪と
 鈴と鳴くふとついでとて各句と韻のやり
 ありて才之と口合のやりて遠くまよとて
 ねまもとついでとて各語とよのまよとありて用
 ありまよとて顛倒の代と用いする句作の用
 と稱すまよやねとくげけの沙るとついでとて香
 露と鶯と粒と梧棲と老れ枝とついでと杜少陵

う各句せらば顛倒の用とすよと香稻粒といひ
 碧石指枝といふ粒と枝といふとて用ふ言を
 りて顛倒の比とめらち申すはく錯綜顛倒
 もあれと世評し事及とあらざるもせざるを
 杜律の諸おし錯綜顛倒の比といひて
 のおぼえ及ざるを言はれぬとていれぬ
 い鑿鑿の比といふもや專し鑿しね申といふ
 結語し申せし言をあらうとて代はははの世月
 一とらう一とらうといふ文代も句格もあらう
 とといふといふといふ句とて字代用申用あれ
 新奇

さいつわうそのかまは格の用とてそのい
 一とらう句作の可し用あらん言はるるおの
 あつとらう一とらう句作の可し用あらん
 一

○ 夏字とて諸此事

むしとらうとて夏字とて格と和漢とて言はれ
 あれと所合しけ格と用ゆるいおとて能格と格
 とやとらうとて夏字とて格と和漢とて言はれ
 ○ 夏字とて諸此事
 夏字とて諸此事
 夏字とて諸此事

かゝる調子もさうなるとも、流の格とやらに
されけは比の能はずし格とやあると或ら
低句よりさう句よりさうあり附合とふね
し附合あるさう句より低句よりさうし語流
の拍子よりさうあれせられさうさうの句せ
お句とあまるとさう時とさう低の論より及ら
け格とふさしん合さし

○ 越向一し句作之此事

中古と連流の各句も附句も越向と句作と

差ふなれぬ教中人もさう時あまらさうさ
者しと調よりさうしけぬし我より越向とさ
し執中流ありし越向とさししと體とら
や打越より二なるれさるとさあも句作と
ししと用とささしお句の流ささしとさ
さうさうの各句と附句とさししとさ
の控せらるる白馬の類説よりし曲節地の様
也

- 各句曲
- 幸崎のねとさしし
- 幸崎のねとさしし
- 幸崎のねとさしし

くはらむ向作と秋此接おあらんうら

^曲お入の子に大各此秋咲く

△ ^節お入の子に隣々秋咲く

^地お入の地をくらの秋咲く

かく之様の向と作りて二所の家評とくかよに

お母くを隣の秋とく移しけりぬらぬら大各此

秋もく之れとけりを二所此能滑ふれと奇言

新語と好むくまよあくとく弟とく門の秋

さくわらぬらくも各此夜語とおよして我が

秋の之様と事とくに山お入の地をよ秋と起れ

くと作へ前のうのよはさうてすゆ一々れ起字

の働と地と曲とよはまされて奇怪と教ふる所

まらんくしの秋とくゆ合ふる例の二所よ

人あなれやおのり耳同とくむむと

いよる此改め情と失くさくさきとい同よきとら

耳とけりさくもはねめ人うてはねの言ふに

俗語事話とくあよとくる白馬の遺訓とむ

うらんはさなうら一能滑の世はあれ人よ

藝^ケ睦の用とあうて藝^ケ睦とて貞服とてあはれ

い睦とくあうてむら節あ一縷子論子とむ

高ひは功者も高きと打つて

△ 親の位牌も存せ 表見世

されは古来の對附とつらむを 老本の文に極と
し申子に後の禮と附するを 子對とつらひ意
對とつらひ後も 膝向の如例あれし今つら親と
子に對し所の着ひの表^{ラモミセ}店も存せ此禮の面^{ラモミセ}側
と對して全くあらむは 尋ねし詞に對し
あつことを例のするに ことつらむとせぬし 申練の
中此事とつらひからの言あしと ことと曲當此
秘授とつらむ 世より古来の對附と今つ子新

製の對附と 今つ仙女にのみまされとおさるし
今つ附方の八辨と今つ主人を 今つ此も後を
衣食令負福の末と ことつけてまき今つ有心の
附方と今つ一くも 場と今つ此東洛山海より
家内と今つおのたまひと ことつけておぬく今つ
の附方と今つ一つ 町分と今つ晦朝を今つ夜より
明晴の所はとつらひ 町部と今つまはる秋文より
弟供正月の行事とつらひ 二辨と今つ多用して
或は有心の附合も あり今つ或は今つ親の附合
もあり今つ一と今つ今つ二辨と今つ世より今つ
の

時とあましくおそねふまを有心う命款の御を
道場の遣向うとし七名の當用とあましく御
も始とあましく御の遣向うしね
よ其入う其場の所不とまり天相う御おの趣向
とあましく御の遣向うしね
いつたり志うれの案方と附方とを御とさし先
事一てと事と口と附らぬとさし御の遣
ふあれと二名一附とさし御の遣向うしね
そふ對附しけりよ空境し古法の大さし御
あう御の遣向うしね新製なれは御の遣向

のそむ時を御とさし御の遣向うしね
自己の御とさし御の遣向うしね

○懐常の各月御事

御心連能の御とさし御の遣向うしね
てけをと御とさし御の遣向うしね
つた向うと御とさし御の遣向うしね
のちのひと御とさし御の遣向うしね
御折と御とさし御の遣向うしね
向と御とさし御の遣向うしね

ありきりるにひの折を表十の句よりとて表と
 八の句とある始と終の表を教うしてひのひとまこと
 して各候の折ととりけりて点式の類に八の
 句よりひのひとまこと懐中の中候とて表
 と面の志嫌と輕重此差ふととるべき也此
 七十二候とて百約とて折とを教うてこの折
 の表と八の句ととてとれは又月よりとて各
 七十二氣候とてとれり國中とて折と
 さらしとて此の表を教うて中此の各目あり
 表と八の句ととてこの折と表と此の

六の句とてとるは深中の平帖よりなり又十約
 と古代よりして百約の事と減ととると百約の
 折附とて教うとて始りて二ツ三ツとてとら
 次第とて各ヲ各ヲとて終る也けねし二折三折の
 懐中より各ヲ各ヲとてとらるる一折の介
 とけの者略あれは又十約をせうして七十二候
 とてとらるとち終りて二ツ三ツとて又十約の表を
 一二の折此表とてとらるととるはとて此の時を
 とるはとて或はとらるる也とての事して一折此
 こととて作らまはめやとて各とてとらるる

その例のうへ倍ありし移るに祝言のひしきも
いふむしうを各同の風流ありしるを十八番の
歌合よりそれ後人とそれをいふる多し下
の句とあつて二十六年の各とあつりたより
月花も二折の式あれとさう十二句とさうは
今式より二花二月の例ありた式の遺訓も
る答より一しそ尾と二折の時直あり或は折
の流れと祝一或は歳暮歳旦の賀より如致と
いふありさやさうとさういふこもいふる
そ尾と合より月花の二折とそれは模範より

右よりさうを格より一或は二折よりたむ時
あれしはうを公式の論もあももそをそれを
とされしむいむ長短の二行を故は減後
の新製より一才丁を求約の用あり短齊よ
へ時直の常用あり求約の下にさう

○求約の能讀より向むた事

又よ能讀の求約よりかを加れ奥儀抄の例を
かりて和齊此約はよ効りやとれむし式
故はのせし例より例ありて武らの素とそ

ありし處に遺集の命をかねて連社の名を
 を催されしは菟蘭のたはるるよりたの事
 ありてやこむるをそれよりよに求約の事
 へ能潜の世はよ急用ありと論を好事の所は
 へゆされし和音連歌のよりらひは漢和とい
 求約といひよひてあるを餘力をねへし減ぬの
 行生とをけ悔てあかぬ求約の事とこころ
 へ詩を絶句より律詩より假名の二韻と用中
 へたれし歌行類とを篇よりまをる換約の格
 ありぬ一約す字よりて自由ありとけぬ今式よ

へ長歌行といひ短歌行といひ二つの名目と新製衣
 源氏行と身仙行といひたらし古式の名目あり行
 のて字と候より韻と行^{ツラ}なることより歌行類
 へありしは但心長身短身とを身仙の流
 にもとありしは古例よりたらしよいまもあるに
 求約の能潜をけやまをよひたれりと換約の用
 へたれぬの時と一約は字よりへこの時と一初めよ
 同約と但一約とをなすべく同約と同字の兼細の
 差ふより一とたらし和漢の旧例よりて細行の
 求約の序説とあり和漢又操へ兼心知とをへし

六八と用やしく身代と短音を求初め程とよ
（ま）也右の口らおと求初めお教音あし接
まれの和漢の通用うて能階の字同しは
と也

○同季よむ句まきや也事

むうらうおはの能階も同季をみるまは定代
あれとみるはしくおとみるはうてらるはしくお
いさるはるまう今能階の者はよま秋いさる
はるよおまうらうはるまうらるにるあれらら言果
のまき節のほしきくし解のちおとされらる百約

の代とせらうらる武うて連音の控とらほよまはし
あしとせらうてまうてまは又ら向らあるし百約を
はうおねの言あうし今うま音と短音とを
月花の元はあうてまうら月秋の歌もやる
まれの身代と今お二と二月とまうたと宗神の比
お勅免と古例とひまうてお音を例のけ人
ゆつらよまはまてまや今の短音行の二花二月
の論よまうらうとまうらま秋のまもまうて或は
まうらうらうらまうらまのまもまうらうらうら
おまうらうて同季をとりれもまうらまうらま

話より或は雨夜の密談として遺稿のほ
 くはさるる今も亦の凡例として百世の
 傳へんとするものと判らざる故の遺稿は
 して東老西話の日用とさるるて當時
 への口者の技論と察して永く傳ると傳ん
 たりとそきて弟子に伝ちりてさるるは
 へ多し子而識とありて例の二冊見とて
 百篇一巻の抄りともて千本一冊の形と
 へさるる者多し其用とさるる者多し例の
 有用と傳ふよ一冊とて一冊断の場ちりて

此を二冊とて二冊とておぼくは故の二冊と
 て一冊は一例の抄りありておぼくは自己に
 するにありては波りて技論の齊とおぼく
 例と一巻の密談より一巻の密談より一巻
 用伝とて一冊の密談とておぼくは
 事也

東老式星之五終

能信在とお

跋

渡部 犯

いしへ孔子の家語し子夏向れ孔子曰顔回
之為人奚若子曰回之信賢於丘乃至
子路之為人奚若子曰由之勇賢於丘
子夏敬焉而向曰然則四子何為事先生
子曰回能信而不能及乃至由能勇而不能
怯子路之四子者之有以易吾弗與也此其所
以事吾也云と云れい子路も顔回も孔子に及ぶ

而を真言と云ふは詐をばさし勇あるは心
懐病ありて終り孔子と云ふはあつてはれ
と瞻前忽後と讚して顔回ひつらとよく
知れとも情哉不幸短命ありて孔子のるら
侍りともといふはあつてはれと云ふは
亦曰楚夫不漢のむらり二千余歳の軍を
を揮くもつらとよく知れともといふは
断つともさうと人向の常性の虚しくい実と
とあつて虚実のちやとよく知れともといふは
武陵の世世蕉翁と授子一碗の茶と云ふは

了能信の虚言し自在とゆふらん能信あねと
 し信ときれおとと能勇あねと勇ふたふと
 きとくの子児の親ときとふくくも徒とす
 人とんくひ弟子せ中とくつりおあねわ
 日奉ふ中余并ととるをと移ととつふおあ
 ねれきと性の大かあひて人の及らふあね
 あり一しは能信の俗談事話とておあね
 不いむとふし人き俗談の中あ人おあ
 事話とて凡新あも凡新あんと教とねと
 尾入るの耳と遠しとらと又せの可はありて

或と長く或と短くそを我自由あしはる
 らん人のわねとあつてそのれをゆゆしく
 ことと余子の耳とゆわむそきく白馬の
 誠しるあしととる者としてに能信とあ
 ちねねとてに能信とあしと新しと信し
 俗しと新し常あつ人とるふかしくは
 大あつとあけ事と新に能信の二語と新俗
 一樣の優言あつと人の及らふあしとや
 けあしけ或と人の及らふあしとあけて近く
 の愛誼より遠く一世の愛誼と愛ひて

更入百世此的盛名坊与多私命

享保庚戌之月日

書目林

京寺町一條

野田治兵衛

俳諧書目籍同録

獅子庵遺稿

- 一 本朝文鑑
- 一 和漢文操
- 一 俳諧十論
- 一 十論及辨抄
- 一 新撰大和詞
- 一 和漢百花賦
- 一 俳諧古今抄
- 一 論語先後抄

- 假名文集 全十卷
- 假名真名文 全七卷
- 新古今評論 全七卷
- 十論秘説 全二卷
- 日本助語辨 全二卷
- 大和真名文 全一卷
- 再撰真名式 全五卷
- 大和真名註 全四卷

